

ファッション誌を「読む」

〈VOGUE〉を巡る 人びととアメリカ文化

古賀令子 Koga Reiko



Anna Wintour, 2010

トレードマークはボブカットの髪にサングラス、それにシャネル・スーツ、スティレット・ヒールである。Wikipedia より

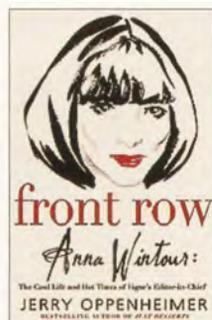
第5回 Anna Wintourの 「VOGUE」

『VOGUE』の現編集長は、Anna Wintourである。2006年に公開されて話題となった映画「The Devil Wears Prada」(邦題「プラダを着た悪魔」)のモデルと言われ、その後、本人が登場するドキュメンタリー映画「The September Issue」(邦題「ファッションが教えてくれること」)も公開されているから、ファッション誌や『VOGUE』に強い関心を持たない方々にも広くその名を知られている、おそらく世界一の「セレブ編集者」だろう。

● Anna Wintour, 『VOGUE』編集長へのステップ

Anna Wintourは、1949年、ジャーナリストのイギリス人の父 Charles Wintour (1917-1999) とハーバード大学教授の娘で富裕な社会活動家であるアメリカ人の母との間に、ロンドンで生まれた。高級誌『Evening Standard』の編集長で高名なジャーナリストだった父を尊敬し、子どものころからジャーナリストになることを考えていたという。しかし、学校教育にはなじまず、名門女子校を高校で中退している。ジャーナリスト志望と併行して、子どものころからファッションと美容への関心は非常に強く、高校中退の原因も、制服を嫌い、スカート丈の事などから教師との軋轢が重なったからとも伝えられている。そして、当時、最先端のファッション発信源であった服飾店・BIBAでのアルバイト店員が、ファッション界におけるキャリアの助走となった。

1970年、『Harper's & Queen』誌の編集アシスタントとしてファッション誌の世界に入る。1975年、ニューヨークに渡り、『Harper's Bazaar』のファッション・エディターの職に就き、その後、新刊された『VIVA』誌や『SAVVY』誌、『NEW YORK』誌のファッション・エディターを経験するが、いずれも



Jerry Oppenheimer 『Front Row: Anna Wintour: What Lies Beneath the Chic Exterior of VOGUE's Editor in Chief』表紙

邦訳版も『Front Row アナ・ウインター ファッション界に君臨する女王の記録』(マーブルトン)のタイトルで出ている。



『VOGUE』1988年11月号表紙
モデルは19歳の Michaela Bercu。
撮影は Peter Lindbergh。



『VOGUE』1989年6月号表紙
モデルは Ralph Lauren のピーチ・コートを着用。撮影は Peter Lindbergh。

長続きしなかった。際立って強い自己主張で上司を含め周囲との軋轢が絶えなかったといわれるが、何よりも Wintour 自身が、『VOGUE』のエディターになることだけを考えていたことが、根本の要因だったと、Jerry Oppenheimer は、『Front Row: Anna Wintour: What Lies Beneath the Chic Exterior of VOGUE's Editor in Chief』(St. Martin's Press, 2005) に書いている。Wintour は、最初から、『VOGUE』のエディターを目標に定めていた、と『Harper's & Queen』の同僚エディターも同書で証言している。『VOGUE』の中でも本家アメリカの『VOGUE』編集長が目標だった。そして持てる力——ファッション・エディターとしてのセンス〜女性としての魅力、人脈、財力——のすべてを集中させて、目標への道をまっしぐらに進んだ。

1982年当時の『VOGUE』編集長 Grace Mirabella との面接では、Wintour の不遜な態度で Mirabella の不興を買うが、Mirabella の上司である編集部門統括者の Alexander Liberman には気に入られた。

翌年、Liberman が Wintour のために創設したポジション、『VOGUE』のクリエイティブ・ディレクターの肩書で、念願の『VOGUE』入りを果たした。念願だった新しい仕事に相応しい服装として、「タイトショートスカートのシャネル・スーツを「山ほど」購入した」と伝えられている。

しかし、Mirabella と並び立つことはできず、1986年には、イギリス版『VOGUE』の編集長に転出することになる。人事を手始めに誌面作りを改革を起こし、それまで保守的だった英国版『VOGUE』を最先端のトレンド誌に変身させた。

1988年には、ニューヨークへ戻り、『House & Garden』誌の編集長を半年ほど担当し、ここでも、『HG』への誌名変更を手始めに Wintour 流の誌面大刷新を行った後、同年夏に念願のアメリカ版『VOGUE』編集長の職を手に入れたのだ。

イギリス版『VOGUE』や『House & Garden (HG)』における大変革についての評価は分かれる。誌面は刷新されたが発行部数や広告収入などを含めた雑誌経営としては、必ずしもプラスではなかったからである。一方、雑誌運営に大きな問題がなかったのにもかかわらず解任された前任者の Mirabella に同情的な論評も少なくなかった。しかし、1985年のアメリカ上陸以来、ファッション誌のトップの座を大きく脅かす存在となってきたアメリカ版『ELLE』への対抗策に頭を悩ませていた Liberman と Condé Nast 社トップの S. I. Newhouse にとっては、当時 39歳と若く、斬新なアイデアの持ち主であるように見えた Wintour こそが 1990年代の『VOGUE』を託すに相応しいエディターであると考えられたのだろう。

● Anna Wintour の『VOGUE』：ファッションとセレブ

1988年11月号が Wintour 編集長のデビュー号である。『VOGUE』の新時代の幕開けを告げるのに十分なインパクトのある表紙が11月号を飾った。ナチュラルなヘアスタイルの若いモデルが着るのは、十字型に人工宝石をびっしりはめ込んだ1万ドルはする Christian Lacroix のトップスに、普及品のウォッシュアウト・ジーンズの組み合わせ。お腹も見せている。ジーンズが表紙に登場するのは初めてのことだったという。このコーディネートについては本文中で“Haute but not haughty”というコピーがつけられているが、ストーリー感覚とリッチ & ゴージャスさ、ヨーロッパのクリエイティビティとアメリカ



『VOGUE』1990年10月号より
 『Rock'n Royalty』のテーマで、服はChanel。撮影はIrving Penn。

カのカジュアル感覚が、素晴らしく組み合わせられた、“mix master”と言われる Wintour の真骨頂ともいえるデビュー作である。

1980年代末～1990年代には、こうした Wintour らしい切れ味の大胆なファッション・ページが、新生『VOGUE』をはっきりと印象づけている。

表紙に関しては、1989年6月号の表紙には、ノーメイクで濡れた髪のモデルを登場させて、これもまた、それまでの暗黙のタブーを打ち破ったとして話題になった。

「セレブの活用」も、新しい『VOGUE』の基軸の1つだった。1989年5月号表紙の Madonna から1993年5月号の Diana 妃まで、超のつくようなセレブ女性がたびたび表紙を飾り、『VOGUE』の売り上げ増には直接結び付かなかったとしても、この雑誌への注目度は著しく向上したと思われる。1998年の12月号では、時のファースト・レディ、Hillary Clinton が自信に満ちた美しさと登場しているが、ファースト・レディがファッション誌の表紙を飾るのは、もちろん史上初のことで大反響を呼び、ニューススタンドでの販売部数は100万部を超えたという。

そして、Wintour 自身がメディアに注目されるセレブだった。『VOGUE』編集長という地位に加え、強烈な個性とフォトジェニックな容貌から、メディアの取材対象として注目されてきた Wintour だったが、短期間アシスタントを務めた Lauren Weisberger が書いた『The Devil Wears Prada』(Broadway Books, 2003) がベストセラーとなり、2006年に映画化作品が公開されてからは、Weisberger は否定しているが、Prada を着る主人公のファッション誌編集長が、Chanel を常用する Wintour と重なって、ファッション誌愛読者以外からも注目される「セレブ」と化した。

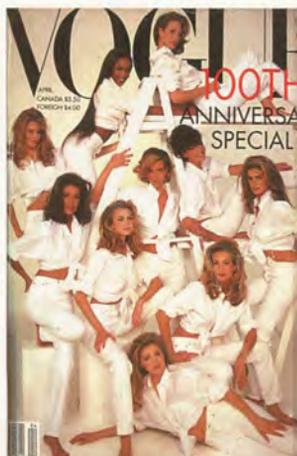
Wintour の『VOGUE』は、ライバル誌『Harper's Bazaar』や『ELLE』を引き離して1998年には創刊以来の最高収益を上げるまでになり、Condé Nast 社内はもちろん、ファッション業界の有力者たちが口々に Wintour を絶賛した、と Oppenheimer は書いている。



『VOGUE』1998年12月号表紙
 Clinton 大統領夫人は、Oscar de la Renta のヴェルヴェットのドレスに Cartier のジュエリーをつけたゴージャスな姿をホワイトハウスのレッド・ルームで撮影されている。Wintour は Clinton 夫人の個人的ファッション・アドバイザーの役割も務めていたという。撮影は Annie Leibovitz。



映画『The Devil Wears Prada』のアメリカ国内劇場公開時のポスター
 原作の邦訳版『プラダを着た悪魔』は早川書房から出版されている。



『VOGUE』1992年4月100周年記念号表紙

Christy Turlington や Cindy Crawford、Claudia Schiffer、Naomi Campbellら10人のトップ・モデルがGAPのシャツとホワイト・ジーンズを着用している。撮影はPatrick Demarchelier、Annie Leibovitz。



『VOGUE』1999年11月号
Millennium特集の「モデルの変遷」ページ

● 『VOGUE』100周年とMillennium号

ところで、1992年に『VOGUE』は100周年を迎えた。1892年の創刊は秋だったが、1992年の100周年の祝賀パーティと記念号は、4月に企画された。そして、1999年11月には20世紀を締めくくるMillennium号が企画された。100周年号は『VOGUE』の100年を、Millennium号は20世紀のファッション文化を、それぞれ俯瞰しているが、「モデルの変遷」など、懐かしく、また美女の基準の変化も垣間見ることが出来て興味深い。

● 2000年以降の『VOGUE』

2000年以降もWintour下での『VOGUE』は順調に展開が続いているように見える。例えば、本誌からスピニアウトした2誌、ティーン向けのファッション&スタイル誌『Teen VOGUE』と『Men's VOGUE』がそれぞれ2003年、2005年に創刊されている。ただ、『Teen VOGUE』は刊行が続いているものの、『Men's』は2009年より独立した刊行物から年2回の本誌『VOGUE』に挟み込みの付録となっている。また、『Men's』と同時に創刊が計画されていたアメリカ版の『VOGUE Living』が具体化しなかったことなどから、全てが順風満帆ではないことがわかる。

本体の『VOGUE』は堅調で、2004年9月号は832ページという史上最大の記録を達成し、2007年9月号は840ページとその記録を更新した。『VOGUE』や『Harper's Bazaar』などのアメリカのメジャー・ファッション誌において、9月号は特別な意味を持つ。3月号と9月号は、それぞれ春夏のファッション、秋冬のファッションを特集する号なのだが、特に9月号は、より価格の高い秋冬ものを扱うこともあって、最重要号であり、ファッション関連企業の広告出稿も最大となる。そして、そのページ数は、編集記事の充実度とともに、広告出稿の多さ、つまり想定読者数への期待を示す指標でもあるのだ。成功の証の一つである。この号の制作過程は、Wintourを追ったドキュメンタリー映画



『Teen VOGUE』2011年11月号表紙
この雑誌ではWintourの娘Katherine Shaffer（通称Bee）が創刊以来、寄稿エディターとして参画している



『Men's VOGUE』2005年7月副刊号表紙
モデルは当時人気絶頂のGeorge Clooney。



『VOGUE』2007年9月号表紙
840ページという史上最大規模の雑誌であることを表紙デザインにも誇示している。

「The September Issue」にのぞきみることができるが、2009年の公開時には、「The Devil Wears Prada」の実録版としても話題になった。

ところで、長引く経済不況やマルチメディア化を背景に、ファッション誌ビジネスの厳しさが進行する中で、市場ニーズにフィットしない雑誌はシビアに淘汰され、生き残りをかけて『VOGUE』以外の雑誌も当然ながらさまざまなアップデートや大胆な誌面刷新を行ってきた。結果として、1980年代末には大きなインパクトをもたらしたWintourの『VOGUE』は、現在ではさほど突出した印象を与えなくなってしまったように見える。Wintourは1999年に『VOGUE』編集長在職10年を超え、自身も50歳となった。そういうことと関係があるのかなのか。

近年の『VOGUE』では毎年8月号に「AGE」特集を組むようになっている。Mirabella解任の要因となった経営陣との軋轢の一つに、「女性の老化」を扱おうとしたことがあった。時代が変わって、雑誌を取り巻く環境（読者ニーズ）が変わったということなのか、このテーマを取り上げているのがMirabellaでなくWintourだから許されるのか…。ずっと『VOGUE』を眺めてきた筆者には興味深いところである。

また、Wintourの署名入りの「letter from the editor」が、ほぼ毎月、誌面に登場するようになったのも2000年代以降のことである。Wintourは、ファッション誌の世界に入った時から、文章力、さらに言えば言語力の貧弱さが初期の同僚や上司たちに取りざたされていたとOppenheimerは述べている。前任の『VOGUE』編集長の中で、唯一Wintourが関心を示したDiana Vreelandと同じように自筆のサインが入ったこのletterは、実際にWintourが書いているのかどうか分からないが、テーマも意外なほど地味で、確かに、切れ味鋭いスタイリッシュな文章とは言えないかもしれない。

いずれにせよ、Wintourのファッション界における存在感はますます大きくなってきているようだ。長年のファッション業界への貢献が評価されてイギリス政府からOfficer of the Order of the British Empire (OBE, 大英帝国勲章) を授与されている。また、The American Society of Magazine Editors (アメリカ雑誌協会) は2010年の“Hall of Fame”にWintourを選んだ。

(文化学園大学特任教授／ファッション文化論)



『VOGUE』2007年8月号
『THE AGE ISSUE』表紙
19歳から91歳までのファッションを取り上げている。



『VOGUE』2009年1月号のサイン入り「letter from the editor」のテーマは「Change」
Barack Obama 現大統領が劇的な勝利を取った大統領選の直後で、表紙にも流行語のようになっていた「CHANGE!」と記された。ちなみにWintourは民主党支持者である。